

婦人と子ども

第貳巻第五號

(明治三十五年五月五日)



(本欄は凡て轉載を禁ず)

樂隊の大勝利

やまとの翁

さても或田舎の農夫が、一匹の驢馬を飼って居り
 ました。始の間わ、この驢馬中々よく働きましたか、
 だんく年がよってきてからにわ、さっぱり力がな
 くなって、も一何の役にもたぬよ一になりました。

夫それで主人しゆじんも まづ仕方かたがありませんから、近々きんきんに之これを屠ころして皮かわにしよーと考かんえて居ゐりました。處ところが驢馬うまの方はうでも、だんく風向かぜむきが面白おもしろくなくなつたから、何い時つまでも茲こゝに居ゐては どんな目めに遭あうかも知しれないと考かんえ付ついたもんですから、或ある日のこと そつと家うちをぬけ出だして 東京とうきやうの方はうえと走はしり出だした。
 『東京とうきやうえ行いつて…そーさ、僕ぼくわ樂隊がくたいになろーかな』
 こんなことを考かんえながら、或ある所ところえ着つくと、道側みちばたに大おほな獵犬かりぬいぬが さも勞つかれた様ように 力ちからのない聲こゑでうなつて居ゐる。

驢、オイ君、一体どーしたの？ そんな大な身体して
 犬、オヤ驢馬君ですか、僕ももー御覽の通り、こー
 年をとってわ駄目です、獵にわ行けないし、主人に
 わ打たれる。それでこゝまで逃げ出してわ來たです
 が、さて、これから先わ、どーして食って行ってい
 ーのかと夫が案じられましてね
 驢、ハ、ーそーゆー譯ですか、時に僕わ今から東京
 え行つて樂隊になる積りなんですが、一人でわ面白
 くなし、君が行つてくれると丁度いーなし、僕が笛
 を吹く、君が太鼓を打つ、いーじやないか、ねー犬

君』

犬も此説に賛成してやがて二人連で出かけた。

暫く行くと今度わ一匹の猫に出遭った、今にも

泣き出し相な顔をして道の真中に座って居ます。そ

こで驢馬が又言葉をかけて、

「オヤ猫さん、どししたの？何か御心配なことでも

あつて？」

猫何だつて私の様になつてわ面白事も何もあ

りよーかありますまいよ、こんな年に年を取つてから

わ、齒もさっぱり利きませんから、もー鼠取り所の

騒ぢやない毎日く火の側に座って居ますからね、
 とくお女将さんに追い出されてね、これか
 らどししたらいかと思つて心配していますのさ」
 驢「オヤくそれわお氣の毒さま、夫じや私等と
 一所に東京え行つて、樂隊になりなさいな」
 猫も今の處てわ、別に仕方がないのですから、す
 く賛成して、夫から三人で一所に歩き出しましたが、
 今度わ或畑の處え來ると、その小屋の屋根の上で
 一羽の雄鶏が力一杯に鳴いて居る。そこで又驢馬先
 生が、そこえ出て、

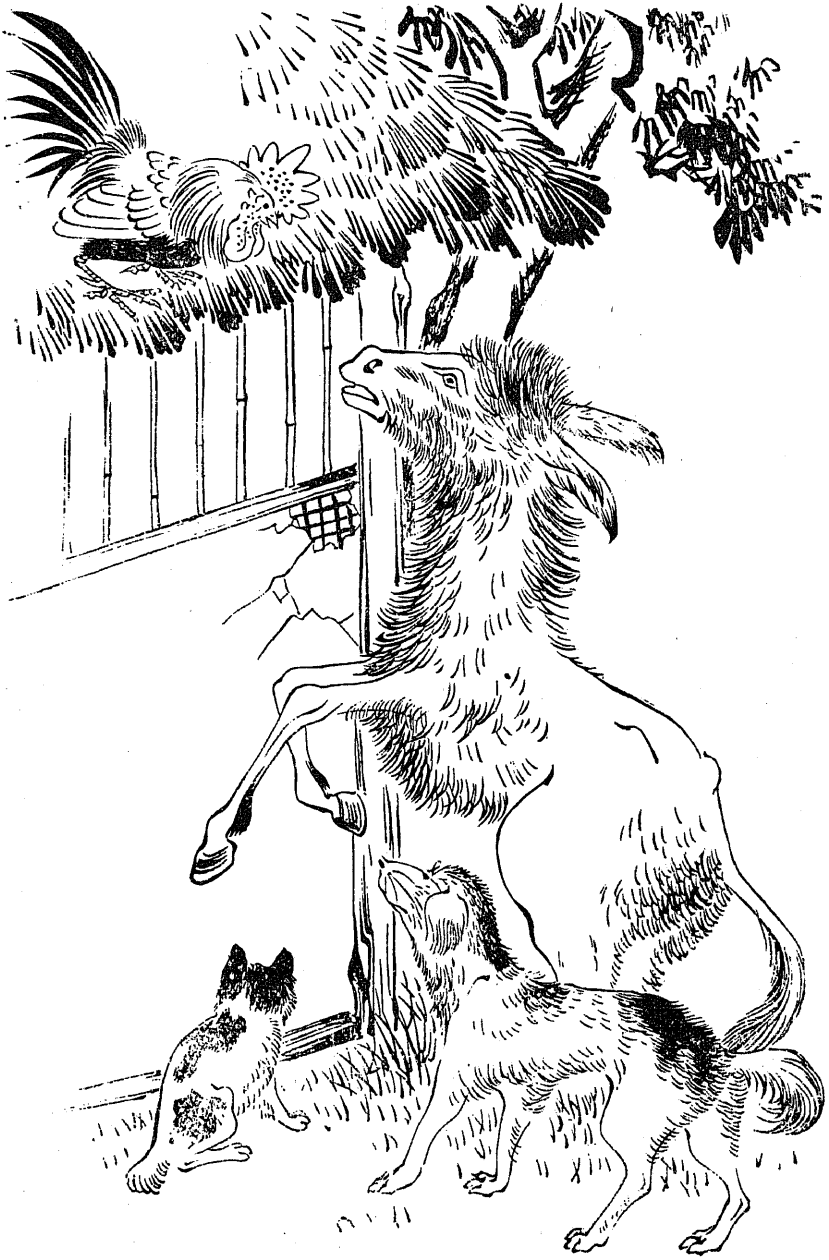
「驢やー今日わ、時に君わ一生懸命に鳴いてる様ですが、一体どーした譯です？」

「鶏」一体わ、僕わこーして夜明を知らせるのですが、ね、明日わ、私の家にお祝い事がある相でお女將さんの話によると、先づ第一に僕をしめ殺してお吸物にするのだ相な、もー僕の生命も今夜きりだから、それで出来る丈け長く喉一杯にないたのさ」

「驢」やれくどれもこれも、氣の毒な話し許り、でわ君もこーしなさい、私等わこれから東京え行つて、まー何か、死ぬよりわいーものを探そーとゆー咄な

んです、君わ先づ一番いー聲を持つてるから、どー
 だね一所に樂隊になるーじやないか、すると君の聲
 も又一層ひったつぜ』

そこで鶏もすぐ此説に賛成して、都合四人で以て
 旅をすることになった。だんく行って日の暮れ方
 になつて大きな森の處え着いたからして、先づ今晚
 わ、こゝで泊つて行こーと云ふ相談にきまりました、
 驢馬と犬とわ一所に木の下の横になる、猫わ木の枝
 にかき上る、鶏わ一番上の枝の方え飛び上つて、そ
 れで皆が寝ることになりました。



處ところが鶏けいがズット高い枝えだに上あつて方々はうを見渡みわたした
 所遙遠ところい所に當あつて、一寸ちよつとした火ひの光ひかりが目めに付ついた
 そこで上うへから皆みんなを起おこして其事そのことを咄はなして之これで見みる
 とこゝわ余あまり人家いんかに遠とほくあるまいと告つげました。す
 ると驢馬うまが

『それじやー諸君しよくんどーです、夜分よぶんだけでももつ
 と歩いていっその事こと其家そのうちまで行ゆく方がいーじやあ
 りませんか、こんな冷つめたい所ところえ寝ねるよりわ』

犬いぬ然しかりく、おまけに肉にくの一片ひときれに骨ほねの二三さん本ほんもあ
 ると、とんだご馳走ちせうになれますよ』

猶贊成さんせいく

そこで其通り相談がきまつたもんですから、そんな
らとゆーので、皆が又起き上つて、其火の方を目的
にして、森の中を出て歩き出しました。

(つゞく)